

福岡県環境教育学会

Fukuoka Society of Environmental Education

ニュースレター

Vol. 66 2021.11.3

- 1 会員寄稿 「生きた化石カブトガニの棲む海を次世代に残すために」 高橋俊吾・・・P1
- 2 特集 福岡県環境教育学会第24回年会報告・・・P4
・第24回年会を振り返って 年会実行委員長 野村政修
・発表概要報告 石原 忍・坂本憲明・野村政修
- 3 会員寄稿 「日本環境教育学会第32回大会（北九州・online）を終えて」 三宅博之・・・P7
- 4 第43回例会（筑後地区担当）のご案内・・・P8

生きた化石カブトガニの棲む海を 次世代に残すために

日本カブトガニを守る会福岡支部長

高橋 俊吾

地球の歴史の中で5度の大量絶滅を生き抜いた、「生きた化石」として知られるカブトガニは、国内では瀬戸内海や九州北部に広く生息していましたが、開発に伴う生息場所の喪失等によりこの50～60年程の間に生息域や生息数を減らし、いまや絶滅危惧種となっています。

福岡県においては、主な生息場所として、糸島地区の加布里湾、福岡地区の今津干潟、北九州地区の曾根干潟、そして宗像地区の津屋崎湾が知られていて、各地域で調査や保護活動が行なわれてきました。

私がフィールドにしている曾根干潟は、北九州市小倉南区の瀬戸内海側、周防灘（豊前海）に面し、最大干出面積が517haになる干潟です。そこにカブトガニが生息することは、地元の方には昔から知られていたことですが、広く世間に知られる様になったのは90年代のことです。当会の林顧問によって、1994年から幼体調査、1995年から産卵調査が始められ、現在に至るまで4半世紀に渡ってデータの蓄積が行なわれています。

福岡支部は、1997年に、糸島、今津、曾根の3地区でそれぞれ保護活動を先導されてきた先輩方が中心となり、日本カブトガニを守る会の5番目の支部として結成されました。

私は、居住地が曾根干潟に近いところで、当時勤務地が曾根干潟に一番近い学校で干潟の学習に取り組み始めた時でもあり、即入会しましたが、当初は産卵時期の休日数日間に活動する程度でした。

2000年に北九州市で開催された日本カブトガニを守る会総会を機に、他の人がやらないことで少しでも貢献できればと、干潟沖合にある無人島、間島の産卵調査に10年ほど取り組みました。勤務を終え、干潟が出ているうちに島に渡り、一泊して夜の調査と翌朝の調査を終えて、まだ潮が引ききらない干潟を渡って帰ってくるのです。当時一番若手であったこともありましたが、そこそこの体力とアウトドアスキルが発揮でき、何より自分だけがたくさんの産卵の現場に立ち会えているという喜びを感じたものです。振り返ってみれば、この経験が自然体験活動を通じた環境教育へとつながった面もあるかと思えます。

守る会の活動としては、調査活動、保全・保護活動、啓発活動を3本柱としています。その中で一番重視しているのが調査活動です。カブトガニの生息状況や生態を把握するために、産卵調査や幼体調査を行なっています。曾根干潟では6カ所の産卵場所を確認していますが、それぞれの場所にどれくらいのつがいが産卵に来るか、カウントしているわけですが、産卵期である6月～8月の大潮～中潮の5日～7日間、昼と夜の満潮時間前後各2～3時間かけて実施します。日数にして約40日以上で、夜間調査の難しさや安全上の課題もあって、なかなか大変です。

幼体調査は、干潟に入り、何処にどれくらいの大きさの幼体がどのくらいいるのか、成長度合いと干潟での分布状況、また脱皮や食性等の生態を把握するために、春夏秋の定期調査と、月1・2回の生態調査を行なっています。

ここ数年は、林顧問が長年蓄積してきたデータを途切れさせずできるだけ長く継続させるために、調査人員の確保や調査スキルの向上、調査体制の整備にも取り組んでいます。

27年間データを蓄積していく中で、曾根干潟が国内トップクラスのカブトガニの産卵生息地であることや、周期的な変動の可能性、曾根個体群の産卵特性等、明らかになってきたことがたくさんあり、それらを保護活動や、産卵観察会等の啓発活動に活かしています。

保全・保護活動としては、主に産卵場所の環境整備として、漂着海藻や漂着ごみの片付けに取り組んでいますが、近年気候変動の影響か豪雨や大雨が増え、河川からの大量の流入ごみが海岸に大量に押し寄せて漂着し、カブトガニの産卵や卵の発生を阻害する影響がでています。守る会の少人数では手が足りず、地元のまち作り協議会や企業等と協働で取り組んでいます。

8月下旬～10月上旬には、その年に産卵した卵から孵化した1齢幼生が砂の中から水中に這い出て潮流に乗って干潟に散らばっていく離巢が見られますが、その時の風向きや漂流ごみなどに阻害され波打ち際に打ち上げられてしまう個体が見られます。その漂着個体のレスキューも保護活動として行なっています。大きさ6mm程の1齢幼生をごみの中から見つけ出すのはなかなか根気がいります。

啓発活動としては、守る会主催だけでなく、市環境局や地元市民センター、学校等の依頼を受けて産卵観察会を毎年実施して、カブトガニの棲む海、曾根

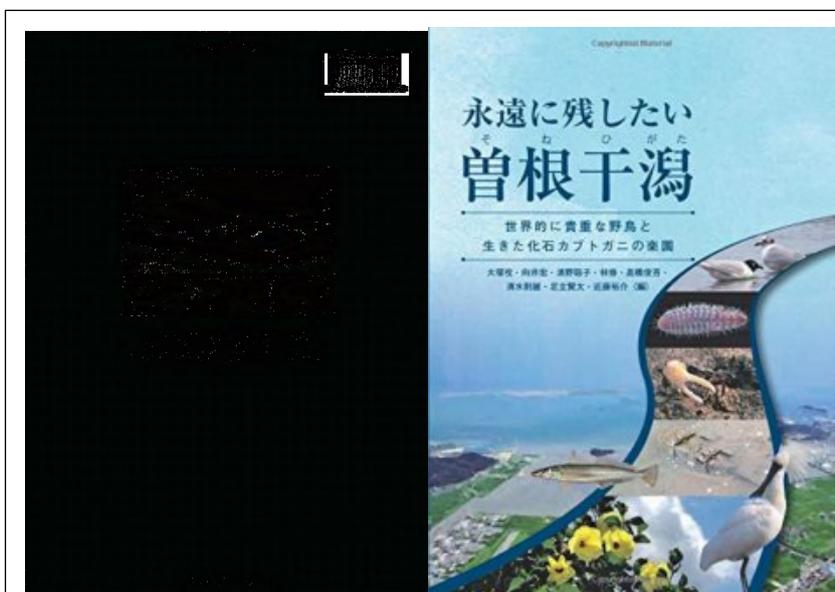


写真1 曾根干潟とカブトガニの啓発本

「永遠に残したい曾根干潟」 2020. 7. 15 発行

干潟の貴重さや価値を、多くの人に感じ、理解してもらう機会にしています。

また、北九州エコライフステージや福岡水もり自慢などの環境イベントへの参加、社会教育施設や学校などの依頼を受けての講話や出前授業などにも取り組んでいます。

昨年7月には、広島大学の先生方の強力なバックアップを得て、念願の曾根干潟とカブトガニの啓発本「永遠に残したい曾根干潟」(写真1)を発刊することができました。

課題としては、後継者の育成で、長年取り組んできた会員の高齢化が徐々に進み、カブトガニの保全・保護活動を担う人材が絶滅危惧種になりかけているという深刻な状況は当会も同様です。そこで若い人財の育成の機会を意識して作るようにしています。最近の観察会では中学生に解説をしてもらったり(写真2)、今年は幼体調査や産卵調査にも参加の機会を作ってノウハウを伝えたりしましたが、なかなかの戦力になって大変心強く思っています。

以上のように、様々な取り組みを行なってきましたが、肝心の曾根干潟のカブトガニの現状について、最後にご紹介させていただきます。干潟の幼体の方は、成長はまずまず順調のようですが、干潟の底質環境が安定していないのか、生息エリアが移動する傾向がみえています。産卵状況の方は、表1のように、2016年をピークとして2017年以降の減少傾向に今年もストップがかからず、5年連続の減少という結果でした。コロナ禍でありながら感染対策を徹底して開催した今年の産卵観察会は、残念ながら一つがいても産卵に来ないという、ここ十年ほどで経験しなかったものとなりました。産卵時期の気象条件があまり良くなかった影響も考えられますが、特に、夜間に比べ昼間の産卵の減少の割合が極めて高いことや、南側の産卵場所の減少が目立つことなどが大変気になっています。

カブトガニは沿岸環境の健全性をはかる指標種であると言われます。すなわち、産卵環境として河口域や汽水域の近辺の砂地・砂浜が必要ですし、幼体が成長するための泥干潟、9歳以降の幼体、亜成体が生活するアマモ場、成体が生息する穏やかな浅海域、というように生育段階に応じて多様な環境を必要とし、全てがセットになって揃っていない



写真2 カブトガニの解説をする地元の中学生

表1



いとカブトガニは生息できません。カブトガニが生息しているということは全ての環境が揃った健全な沿岸環境であるということです。

カブトガニの生息状況の変化は、沿岸環境の変化や問題の発生を示していると言えますが、減少の原因を明らかにすることはなかなか困難なことです。我々は、民間の小さな団体で、大規模な調査や専門的な調査はできませんが、今後も継続した調査でカブトガニの生息状況を把握し、提言を行ったり警鐘を鳴らしたりしながら、出来る範囲の保全・保護活動、啓発活動に取り組み、回りの市民や地域、行政等も巻き込みながら、カブトガニの棲む海、曾根干潟を次世代に残せるように頑張りたいと思います

特集

福岡県環境教育学会第24回年会 報告

【第24回年会を振り返って】 年会実行委員長：野村 政修

去る8月8日（日）10時からZoomを利用した遠隔形式で第24回年会が開催されました。御承知のように、コロナ禍のために昨年は第23回年会を中止することになり、残念に思っておりました。昨年の8月頃は、来年こそは対面形式で第24回年会が開催されるものと信じていました。しかし、コロナ禍は1年では終わらず、今年度も対面での開催は難しい状況となり、やむなく遠隔形式で開催する運びとなりました。この間、会員諸氏には日ごろの研究や実践の成果について発表の機会がなく申し訳ない思いでした。やっと北九州地区として責任を果たせたものと安堵しています。

ただ、今回の年会は発表件数が9件と例年に比べて半分以下になり寂しいものでした。これは、パソコンの操作に不慣れな会員諸氏がいたり、コロナ禍による外出規制で実践活動が展開できなかつたり、あるいは主催側の遠隔開催の広報活動が不足していたことなど、さまざまな要因があったものと思います。視聴参加者も例年に比べて少ない状況でした。午後からの開催が良かったのかもしれませんが。しかしながら、発表の水準は例年以上であり、年会も無事に終了したことを御報告申し上げます。

最後に、来年は対面形式での年会開催ができますこと、また発表件数と会員参加者が例年以上に増えること、これらを祈念しております。なお、所用などで視聴できなかった会員諸氏のために要旨集を同封いたしました。どうか今回限りとしてお納めください。

【発表概要】 <報告者> 1～3：石原 忍 4～6：坂本憲明 7～9：野村 政修

1. 「天然資源の有効利用を目指した多孔質多糖材料の開発」

○ 石川健太・菅野憲一（近畿大学大学院産業理工学研究科）

固体と液体の中間状態ともいえるゲルを凍結し、水分凍結に伴う体積膨張による孔の大型化を利用した多孔質材料は、体内に取り入れた薬剤を一定の割合で徐々に放出する薬物除放の担体として注目されている。今回、発表者たちは食品分野などを中心に広く利用されている種々の天然ガム類に注目し、安価で高機能な多孔質材料の開発を目指した。

研究は緒に就いたところであり、更なる明快な構造解析を目指す段階であるが、孔の大きさを制御することで大型のタンパク質や細胞などを取り込める機能材料の開発が見込まれるものであり、大いに期待したい。

2. 「公害防止学習への遠隔プロジェクト WET 導入事例」

○ 菅野憲一(近畿大学産業理工学部)

プロジェクト WET(Water Education for Teachers)は、アメリカで開発された環境教育プログラムであり、水や水資源への理解を深め、主体的な取り組みを行うために使用されている。発表者は、水質関係第 1 種公害防止管理者資格取得支援講座の中で、受講者に紹介しているが、今回は、コロナ禍の中、遠隔授業によってプロジェクト WET アクティビティを体験させ、その事例報告を行った。遠隔授業におけるツールの使い方については様々な実践報告がなされているが、今回、発表者が用いた zoom のブレイクアウトルームに分かれ、グループディスカッションを行う手法は、人に伝える能力を身に付けていくための有効な方法論の一つであると感銘を受けた。今後の更なる内容の深まりが楽しみである。

3. 「液体麴におけるセルラーゼ生産の増強」

○ 小玉大貴(北九州市立大学大学院)・森田洋(北九州市立大学)

焼酎を作る際に用いる麴は固体のものが使われており、液体麴は簡便性において固体より有利であるが、酵素生産性が低いことから実用化に至っていない。発表者達は麴に含まれる多数の酵素の中から焼酎原料の植物繊維を分解することができるセルラーゼ(CEL)に着目した。CEL 酵素剤を大麦もろみに添加することで原料利用率の向上と粘度の低下による作業性が向上することはすでに報告されているが、本研究では、大麦を用いた液体麴により CEL 生産の増強と増強因子の検索を試み *Aspergillus kawachii* NBRC 4308 を選定することで、液体培地の CEL 活性を大幅に向上させることができた。今後は、引き続き CEL 生産増強と相性の良い物品の探索を試みていくとのことであり、素晴らしい結果を心待ちにしている。

4. 「新型コロナウイルス対策中の学校教室における温熱・空気環境の実測調査」

○ 依田浩敏(近畿大学産業理工学部)

本発表は、標題の調査を通して教室における「換気の効果」について明らかにしようとしたものである。飯塚市教育委員会の協力を得て、小学校と中学校の 1 学級ずつを対象とし、年間 3 回(夏季、秋季、冬季)の実測調査(二酸化炭素濃度、気温、相対湿度、グローブ温度、風速、PMV)を行った結果がグラフ化されて詳細に示された。結果とまとめの概要は要旨集に示されている。具体的には、「窓を終日開放すれば、二酸化炭素は 1000ppm 以下になる。開放しなければ 2500ppm 以上になることがあり改善が必要。」「開放する分、冷房や暖房の温度設定は強めないといけない。」「冬季の午前中は特に寒く、換気と暖をとることの両立はなかなか難しい。冬季は乾燥対策も必要。」「開放した際の気流の影響も快適性に影響する。」などの報告が印象的だった。コロナ禍の学校における喫緊の課題に正対する興味深い研究報告であった。

5. 「北九州もったいないっちゃん! すごろくの制作を通しての大学生の学び」

○ 豊田理乃(北九州市立大学学生)、浦晃大(北九州市立大学学生)、三宅博之(北九州市立大学)

本発表は、北九州市の特色(特産物と自然名所)、現代社会が抱える環境問題について小学生に楽しく学んでもらうことをねらいとした「すごろく」の教材開発が紹介され、今回は大学生による体験や制作によるすごろくの評価が、大学生の発表によってわかりやすく示された。すごろくは、北九州市が配布されている詳しい副読本を学ぶ入り口として、および SDGs など環境に関する内容をゲーム感覚で知識習得できるものとして制作されている。具体的には、すごろくの実物写真が示され、すごろくの中には北九州市の特色とともに、「エコ活動の実践例」「環境配慮行動チェック」「食品ロスや SDGs の知識習得」といったカテゴリーが埋め込まれており、止まった場所で解説書を読みながら学びを深めることができる。このすごろくを通して、大学生としても新たに知ることができる内容が多く学習効果が見られるが、特にフードバンクやエコクッキングのような「食」に関する学びが不足していることが指摘されていた。全体的に、大学生の体験や制作を通じた評価は上々であり、小学生に対する教材の有効性だけでなく、連続性、責任性、多面的・総合的に考える力、進んで参加する態度という ESD のいくつかの視点から捉えると大学生の学びにもなるとされている。質疑では、エコクッキングについての質問があり、「買い物」「調理」「食事」「片付け」のそれぞれの段階での環境に対する留

意事項が回答されていた。今後の普及発展性のある有効な教材として興味深い研究報告であった。

6. 「リモート授業を受講する大学生の室内環境に関するアンケート調査」

○ 依田浩敏（近畿大学産業理工学部）

本発表は、リモート授業を受講している大学生（合計 353 名を対象）の室内環境の現状や満足度についての調査結果が報告された。室内環境に関する評価項目としては「デバイス」「温熱環境」「空気環境」「光環境」「音環境」「その他（室内環境が集中力に与える影響、室内の快適性に関する重要度、部屋の総合的な満足度、快適にするために自身が実際に行ったこと）」である。結果とまとめの概要は要旨に示されている。発表の中では、それぞれの評価項目についての結果がグラフなどで詳細に示された。特に、「環境要素別の重要度評価としては、音環境、温熱環境、空気環境、光環境の順」で、音環境の重要性が指摘されていた。また、「室内環境の満足度と授業受講に対する集中度とは相関関係がある」ことが明らかにされていた。質疑では、災害時における環境の場合やその心的ストレスとの関係についての質問が加えられた。今後、リモート授業が普及するにあたり、様々な学生の受講環境に配慮する必要があると考えさせられた興味深い報告であった。

7. 「次世代大容量電池として注目される金属空気電池の開発～コバルト添加バナジン酸塩ガラスを空気極触媒として～」

○ 櫻木貴久¹・松尾紗絵子¹・今村涼太¹・松迫駿介¹・中原日向²・湯浅雅賀³・西田哲明⁴・

岡 伸人³（¹:近畿大学大学院、²:近畿大学学生、³:近畿大学、⁴:環境材料研究所）

本発表は、リチウムイオン電池の次に来るかもしれないと目されている二次電池（充電可能電池）の一つである金属空気電池の素材について充電・放電の実験結果の報告である。具体的には、空気極（正極）の触媒としてコバルトを含むバナジン酸塩ガラスを 1100℃で生成し、これをさらに 450℃から時間差をつけた焼きなまし加工を施したガラスを形成して充電性能・放電性能についてランタン・ニッケル酸化物との比較を行った。結果は、ランタン・ニッケル酸化物よりも高い性能が示されたということである。その後、この結果について生物環境化学科 3 年生を対象に環境教育を行った。

質疑では、この電池への 3 年生の認識は過去に比べてどうであったか、また、コバルトを添加物に選んだ理由を問われた。認識は過去よりも高く、また、コバルトは電子授受の能力が高いという応答であった。

8. 「清浄インテリア実現を目的とした殺菌光触媒塗料の開発」

○ 松尾紗絵子¹・下城直貴²・今村涼太¹・櫻木貴久¹・松迫駿介¹・森岡陽介³・堀 英祐³・

西田哲明⁴・岡 伸人³（所属番号は 7 と同様）

酸化チタン、酸化タングステン、酸化鉄などある種の物質は光を吸収して物質表面上の酸化反応を促進して有機物、細菌、ウイルスなどを分解する光触媒機能を持っている。本報告では、この機能を住宅内の感染リスク低減に応用できないかと考えた。光触媒機能を持つ物質を塗料として室内インテリアに応用し、室内清浄化の方法を提案するために上記の 3 種の酸化物の塗料を作成し、その殺菌効果を測定した。ATP 拭き取り検査の結果、殺菌効果は良好であった。その後、この結果をもとに生物環境化学科 3 年生を対象に環境教育を行った。

質疑では、パソコンのキーボードなどプラスチック材料に練り込んで形成出来ないのかと質問があった。練り込むと表面の酸化力が低下する可能性があり、検討したいとの応答であった。

9. 「北九州市における環境教育・環境人材・環境活動の流れ」

○ 森本美鈴（ふくおか環境カウンセラー協会）

本報告では、北九州市の環境教育の歴史を振り返り、北九州市独自の環境教育を推進してきた結果、環境問題対応人材が「人財」であることを発見し、その一連の過程を北九州市の「市民環境力」と指定している。市は人材育成事業として、①「市民エコカレッジ」による人材発掘、②「環境ボランティア」による人材育成、③「環境学習サポーター」としての環境活動の場の提供、④環境 NPO への助

成金などによる環境活動の支援、を行ってきた。市民性に根ざすユニークな環境教育事業例として、①北九州市環境首都検定、②北九州環境みらい学習システム「ドコエコ」、③「環境体験科」を挙げて、「シビックプライド」が醸成されたとしている。

質疑では、「環境体験科」の内容が問われ、小学校の総合的学習の時間に「環境ミュージアム」等の施設見学などであると応答があった。

日本環境教育学会

第 32 回大会（北九州・online）を終えて

三宅 博之

大会実行委員長として関わりました日本環境教育学会第 32 回大会（北九州 online）は、2021 年 8 月 20 日（金）から 22 日（日）にかけて、北九州市立大学（北方キャンパス）を拠点として online で行われ、286 人の参加者をみて無事に終了しました。口頭発表、ポスター発表、大会企画：基調講演とシンポジウム、国際交流会、支部会員の集い、自由課題研究会が行われました。

この中でも、福岡県環境教育学会の会員をはじめ一般の方々が視聴参加することができたのは、第 1 部と第 2 部のシンポジウムでした。第 1 部のシンポジウムは、大会テーマ「持続可能な社会のゴールを目指して～SDG s 未来都市・北九州からの発信～」に関係しており、基調講演として神崎智子さん（福岡県男女共同参画センターあすばる館長）によって「青空がほしい」運動の意義が説明され、なぜ、北九州では戸畑区の女性たちの運動が最終的に行政と企業間の公害防止協定の調印までに至ったか、そこにはどのような要素が必要であったかが独自の視点で分析、語られました。その傾向は今日の新型コロナ禍の中でも北九州型 SDG s 運動として引き継がれているということが他のパネラーたちの対談によって明らかにされました。まず、元北九州市環境学習課長で、福岡県環境教育学会の運営委員を務めている森本美鈴さんは、「北九州市の市民性に根ざす多様な環境教育の推進」と題し、「青空が欲しい運動」の後、1970 年代に婦人会の活動は消費者運動に重点を移したこと、さらに、1990 年に北九州市環境局が生まれ、環境問題に熱心な市民とともに、市民協働の環境学習を進めていった経緯などを語った。次に「森の育ち場」代表の蒲原聖さんからは「森の育ち場～環境教育の視点から」との題で、決まった場所に学校があるのではなく、教科書も使わず、児童自らが考えるといった理念を持ち、森の幼稚園・オルタナティブスクールの立場からの自らの活動を報告されました。北九州市立木屋瀬小校長、淵上正彦氏さんからは、「コロナ禍の新しい学校の学びをどう作り出したか」と題し、コロナ下での自然との共生を改めて考え、教育活動の価値を見直したことで、新しい学びの形と子どもたちの姿が見えてきたことが報告された。前大牟田市教育長の安田昌則さんからは、ESD を推進するため子ども達を支える地域づくり、地域に誇りを持つための教育が報告された。第 2 部は学会研究プロジェクトの緊急報告を設け、「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）緊急研究プロジェクト報告」と題し、2 本の発表が行われました。双方のシンポジウムは、時宜にかない、計 160 名ほどの視聴者を見ました。

本大会の北九州開催は、2001 年に「循環型社会の構築」をテーマにして開催した第 12 回大会以来のことでこの 20 年間には、ESD（持続可能な開発のための教育）や SDG s（持続可能な開発目標）といった国連を中心とした持続可能な社会の構築を目指した世界的な規模での運動が提起されました。北九州市は、その流れの中軸を担い、全市あげてその取り組みを行っています（そこまでしなければ、北九州市が直面している様々な問題の解決には至らないということを意味しています）。

第43回例会（筑後地区担当）のご案内

今日の地球温暖化により、生物の多様性が脅かされています。ネイチャーゲームを体験し、生物多様性を考えます。また、石けんを広め自然環境を守る久留米市民の会の活動と河川の水質保全とSDGsとの関連で考えます。

1. 開催日時 令和4年1月23日（日）10:00～15:40
2. 開催場所 くるめウス（筑後川防災施設）（ゆめタウン西側、高良川河口）
（久留米市新合川1-1-3 TEL: 0942 - 45 - 5042 ）
（アクセス 西鉄大牟田線「久留米」駅下車、ゆめタウン行きバスに乗り10分）
3. テーマ
「SDGsと筑後川の生物多様性と水質保全」
4. 内容
SDGs関連のネイチャーゲーム（生物多様性関連）を体験していただきます（くるめネイチャーゲームの会指導）。午後から石けんを広め自然環境を守る久留米市民の会の活動報告、SDGsと化学物質に関する話と筑後川支流である高良川の水質簡易試験を体験していただきます。
5. 対象・人数 学会会員および一般 20人を予定
6. 参加費： 無料
7. 申込締切 令和4年1月15日（土）
8. 申込み方法等 下記のところにメールかFAXで申込み下さい。
9. お問い合わせ先 学会第43回例会事務局 時井純子 TEL 090-7295-4767
E-mail jtokii@air.ocn.ne.jp FAX 0942-43-9522（青峰保育園）

事務局からのお知らせ

- 1) 学会運営についてのご意見をお寄せ下さい。
運営委員会は年7回程度開かれています。ご意見等ございましたら、事務局総務までお知らせ下さい。
- 2) 環境教育についての情報をお知らせ下さい。
ニュースレターは年3回程度発行されます。
会員にお知らせしたい情報がありましたら、事務局総務まで記事をお送り下さい。
- 3) 会費納入のお願い。
年会費を未納の方は郵便振替により納入ください。
個人会員：2,000円
学生会員：1,500円
法人会員：15,000円
郵便振替口座番号 01720-3-76825
口座名 福岡県環境教育学会
- 4) 会員を増やしましょう。
入会手続は、まず入会申込書（学会ホームページを参照）を事務局・会計宛に、郵送、FAXまたはe-mailでお送り下さい。
入会申込と同時に、会費を納入下さい。会費納入確認と運営委員会承認の後、入会手続完了のご連絡を致します。お問い合わせは事務局会計まで。

福岡県環境教育学会

<http://www.fuku-kan-kyouiku.org>
E-mail: jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org

事務局

局長・総務

〒811-4192 宗像市赤間文教町1-1
福岡教育大学 坂本憲明研究室気付
Tel: 0940-35-1359
E-mail: jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org
E-mail: sakamoto@fukuoka-edu.ac.jp

会計（会費振込など）

金藤芳就
Tel: 090-4779-3147
E-mail: jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org

庶務（住所変更、入会など）

太田泰弘・平山静男
E-mail: jimukyoku@fuku-kan-kyouiku.org
※住所変更の場合は必ずお知らせください。